

思想史研究とメディア——討論を通して——

一、日本思想史研究における新たな可能性の模索

今回のシンポジウム「思想を語るメディア——近世日本を例として」は、これまでの日本思想史学会のシンポジウムとは、やや質を異にする感のあるシンポジウムであった。

それは、今回のシンポジウムが、特定の思想ないしは特定の思想家、あるいは限定された時代や地域を対象としたものではなかったという意味においてである。勿論、シンポジウムの副題として「近世日本を例として」とあるように、今回のシンポジウムでは日本の「近世」とい

大野 出

う時代を一つのモデルケースとして取り上げている。しかし、これは冒頭の澤井啓一氏の「趣旨説明」にもある通り、結果的にシンポジウムの焦点を「近世」という時代に絞り込むことになったという経緯による。あらかじめシンポジウムの焦点が「近世」という時代に限定されていたわけではない。

思想史研究と「メディア」の関係という問題設定は、必ずしも「近世」に固有のものではない。それぞれの時代の「メディア」の有り様は、おのずから異なっているものの、その視点および問題意識は、日本思想史研究上、いずれの時代にあっても必要なものであろう。

今回のシンポジウムは、比喩的な言い方をすれば、集

約や収束の方向へと向かう性格のものではなかった。むしろ、それとは反対に拡散という方向へと向かっていかもしれない。しかし、報告者にとつても、コメントーターにとつても、司会者にとつても、それは決して不本意なことではなかった。

シンポジウムを通して、日本思想史研究における新たな可能性を模索しようとする言わば波動が、報告者からコメントーターへ、そしてフロアーへと広がっていったと考えるならば、それだけでも、このシンポジウムの一つの目的が果たされたとも言えるからである。

二、討論を通して

シンポジウムでは、澤井啓一氏の趣旨説明に続き、高橋章則氏、福田千鶴氏、若尾政希氏の三者からの報告がまず為された。それら報告内容および趣旨説明については、本誌掲載の各論述の通りである。

三氏の報告、すなわち「媒介」の思想史的意義（高橋）、「メディアを通してみた思想史料論」（福田）、「近世人の思想形成とメディア」（若尾）に対する形で、宇野田尚哉氏、小林准士氏の両者からのコメントが開陳された。そして、この後、宇野田、小林の両コメントーターから

の指摘および質疑に応えるべく、高橋、福田、若尾の報告者三氏が、それぞれの見解を示し、更に、これら三氏の見解に対する両コメントーターからの意見が述べられた。

また、フロアーにも用紙が配布され、質疑および指摘が活発に為された。シンポジウムの中では時間の制約もあり、それら全てを紹介することはかなわず、その中の一部を扱うのみに留まってしまったが、この紙面をお借りして、フロアーから寄せられた指摘の中から、今回のシンポジウムのテーマと深く関わる重要なものを、ここで紹介させていただきたい。なお、個別の報告者に限定された指摘については、ここでは割愛させていただくことにした。また、フロアーから寄せられた指摘に対する報告者およびコメントーターからの知見がある場合は、本誌掲載の各論攷が、それら知見をも包含した論述となっているので参照されたい。

石毛忠氏

社会通念・常識の形成と、いわゆる思想家（儒者、仏者等々）の思想活動とを一体的に捉える視点を考えるべきではないか。

井上克人氏

1、メディアの視点から見た場合、いわゆる日本史学（歴史学）の立場から史料を扱う方法と、思想史学の立場から史料を扱う方法に区別があるのか、あるとすれば、思想史学の場合は、どういふところに特質があるのか。

2、同じくメディアの視点から見た場合、いわゆる文学・芸術・宗教とは区別される思想、もしくはイデオロギーが伝達されていく特質はどこにあるのか。

末木恭彦氏

メディア自体が思想を語るという点は理解できる。メディア自体から思想を読みとるという方向が一つ考えられる。

しかし、他方メディアが思想を昇華したものとして考えうる思想を含むメディア論ともいふべき方法は可能であろうか。

平山洋氏

書物を通して一定以上の層に広められた教養（ともいふべきもの）は、明治維新に何らかの影響を与えたのか。それとも与えなかったのか。

三、総括と提言

以上のような過程を経て、シンポジウム「思想を語るメディア——近世日本を例として」は進行し、最後に、平石直昭本学会会長から、討論を締め括る形で、次のような指摘が為された。

今日のシンポジウムには、幾つかのメッセージがあったように思われた。

一つは、全体図をどのように描くのかという問題提起であり、このことが、かなり強く示されていた。また、思想の形成とその過程を内部からどのように捉えるかということもあった。

さらには、個々の読者が、どのように書物を読んで、自らを形成していったのかということもあった。こうした幾つかの問題提起なり提言が、今回のテーマのメディア論と重なり合った形で出てきている。

そうした複数のメッセージが、我々の頭の中で個別に整理されているのかということが重要なことである。

かつて、丸山眞男は、思想史を論ずる上で、思想

というものを五つのレヴェルに分けている（「思想史の考え方について」*一九六一年初出。「思想を語るメディア」と言う場合、どのレヴェルで考えて議論するのか、その影響関係を捉えるのか、そうしたことを自覚的に考えることによって、この議論はより生産的なものとなる。

そして、シンポジウムの最後に、報告者、コメンテーター、司会者の総意としての提言が高橋章則氏から述べられ、シンポジウムは終了した。その提言を掲げて本稿を閉じたい。

日本思想史研究において、我々が扱うものは、主として書物である。しかし、こうした書物の中には、その所蔵者の様々な事情によって危機に瀕しているものも少なからずある。家が建てかえられる時に焼かれてしまった書物もある。地震の際に蔵に雨が入り、濡れて重くなつた書物が捨てられてしまったこともある。

我々が研究の対象とすべき書物が、実は今も失われつつある。こうした書物を少しでも多く確保してゆかなくてはならない。これからの日本思想史研究の上で、アーカイブスの問題は避けては通れない問題である。

どのようにすれば史料を残してゆくことができるのか、そのことを考えなければならぬ時が来ている。史料が失われてゆくことによって、思想史研究の基盤までもが危うくなる可能性があることを忘れてはならない。

*『丸山眞男集』第九卷（岩波書店、一九九六年刊）所収。

（愛知県立大学助教授）